

■「流域視点による里海再生のためのコンサルテーション・ワークショップ」を開催しました！

主催・共催：環境省、パタゴニア日本支社、（一社）あわい環境デザイン、（特非）ディスカバーブルー

【概要】

令和8年6月4日（木）、大阪市内のオープンイノベーション施設「QUINTBRIDGE」において、環境省が進める戦略的「令和の里海づくり」基盤構築支援事業の一環として、パタゴニア日本支社、（一社）あわい環境デザイン、（特非）ディスカバーブルーとの共催により「流域視点による里海再生のためのコンサルテーション・ワークショップ」を開催しました。

全国で里海・沿岸域の保全・再生に取り組む12団体にご参加いただき、「流域」という視点から課題の構造を可視化・共有しました。（参加者数23名）



ワークショップの様子

＜参加団体＞（環境省令和8年度「令和の里海づくり」モデル事業・パタゴニア R2R プロジェクト）

（一社）あわい環境デザイン	和倉温泉創造的復興まちづくり推進協議会	（特非）海の再生ネットワーク（与論島）
（一社）そっか（逗子市）	貝塚里海づくり未来協議会	名古屋市（藤前干潟）
（公財）肥後の水とみどりの愛護基金	由比港漁業協同組合	（特非）たてやま・海辺の鑑定団
（特非）ディスカバーブルー（真鶴半島）	大阪府（大阪湾 MOBA リンク構想）	三重大学

＜プログラム＞

10:00 - 10:30	オープニングセッション（開会挨拶・進め方説明）
10:30 - 12:10	グループディスカッション1：各団体の現状課題と取組の洗い出し・変数の抽出
12:10 - 13:10	休憩
13:10 - 13:45	各参加団体によるプロジェクト紹介
13:45 - 15:45	グループディスカッション2：変数の関係性・動態の構造化と可視化（時間軸シール）
15:45 - 16:05	ギャラリーウォーク（他団体のアウトプットを共有）
16:05 - 17:00	クロージング：各団体報告等

はじめに、オープニングセッションにおいて、環境省水・大気環境局環境管理課環境創造室の森川室長から開会あいさつがあり、続いて、共催のパタゴニア日本支社の柳谷氏から、ワークショップの進め方について説明が行われました。

同セッションに続いて行われた、「グループディスカッション1」では、各参加団体が取り組む里海づくりの現状や課題について、「変数」（変化する要素・キーワード）として抽出し、付箋に書き出すことによって可視化しながら、里海づくりを取り巻く様々な課題や要素について、活発な議論が繰り広げられました。

休憩を挟み、各団体が現在取り組んでいる里海づくりや沿岸域保全・再生等について、団体ごとに紹介が行われました。それぞれの活動内容や取組の背景、目指していることなどが共有され、参加者は他団体の実践を知るとともに、今後の取組の可能性について考える機会となりました。



課題を付箋に書いて可視化



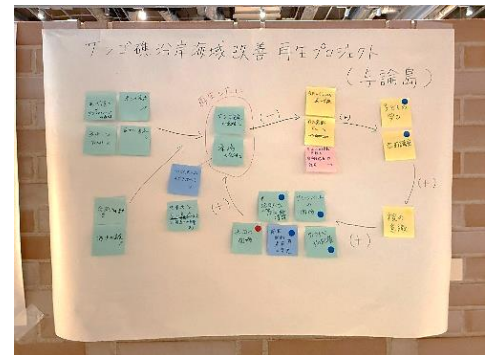
各団体によるプロジェクト紹介



各団体によるプロジェクト紹介

その後、「グループディスカッション2」が行われ、グループディスカッション1で参加者が意見や課題を書き出した付箋を模造紙に貼り、様々な事象(変数)のつながりや、その中で不足している取組(対策)があるかを確認するため、抽出した要素を矢印でつなぎ、変数の関係性を整理するとともに、それらの変化が生じる時間軸を「3年以内」「3～10年」「10年以上」の3つに分けて分析しました。

こうした作業を通じて、個々の課題を単独で捉えるのではなく、課題同士がどのようにつながり、影響し合っているのかを可視化し、課題の構造や、そこから見えてくる新たな連携の可能性を整理しました。



付箋で可視化した課題の構造等を明確化

ディスカッション終了後は、各団体で作成した分析結果を会場に掲示し、参加者が互いのアウトプットを見て回る「ギャラリーウォーク」を実施。その後のクロージングセッションでは、各団体代表者から、それぞれの議論で明らかになった課題等について発表が行われました。

参加者による発表(抜粋)

- ・考えていることを可視化して整理することにより、それぞれの繋がりが明確化され、具体的な行動が見えてきた。
- ・地域の方に取り組みを知ってもらうことが大事であり、そのためにはストーリーを作ることが大事だと感じた。ストーリー作りをサポートしてくれる方がいると大変助かる。
- ・子供たちを中心に活動しているので、「遊ぶ」、「食べる」、「集う」等、楽しんでいることを中心にして、自然への理解を深めてもらいたい。
- ・「いい森」ができないと「いい里海」はできない。森と海をつなぎ、ひいては町づくりに結びつけるという一貫したビジョンが見えた。
- ・自分達が取り組んでいることに対して、いかに一般市民に関心を持ってもらえるか、情報発信をしていくかが大事である。
- ・「水産物・生物の量」を中心に、地球温暖化や黒潮大蛇行、栄養塩量などの環境要因に加え、「連携の質」が重要な要素として位置づけられた。「連携の質」は、水産物の量だけでなく、教育・観光プログラムや市民の認識にもつながっている。
- ・里海の本質である、人の手が加わることで生物多様性・生物生産性が高まるという構造を可視化でき、大きな学びとなった。

参加者は各団体の成果を共有し、現場・専門家・制度が孤立して動くのではなく、互いの結節点を見つけながら協働することや、継続的な対話が必要なことを全員で確認し、ワークショップが締めくくられました。



ギャラリーウォークで互いの
アウトプットを共有



各団体代表者による発表

